ペスタロッチ『探究』草稿の方法と思想

― 自己理解と社会批判 ―

宮　崎　俊　明

Zu Schreib- und Denkweisen in J. H. Pestalozzis *Entwürfe zu den „Nachforschungen“*[1)]

――Selbstverstehen und Gesellschaftskritik――

Toshiaki MIYAZAKI

I. テキスト問題と研究の先行形態と動向

ペスタロッチにおけるテキストの草稿と成稿との問題として，たとえば，周知の『夕暮』の場合，エフェメリデン誌の初版本(1780)，人間陶冶週報誌のニーデラー本(1807)，批判版収録のファィルヘンフェルト本(1927)，ルプレヒト本（1935）等があるが，後二者は，草稿を検討しテキストの真正性を追求する校訂作業を推進したのに比し，前二者は教育思想の形成ないしその歴史の視角からして，きわめて興味深いものをはらんでいる[2)]。一般に草稿は成稿に対して補助的従属的資料になるだけでなく，成稿にない草稿部分，草稿にない成稿部分，つまり相互に重複せざる部分が潜在と顕在の両面で興味をひく。それは，いわゆる史料の検証や批判，意味論的局面の抽出に関してよりも，たとえば，W. クラフキが，W. フンボルトを例にそのテキスト分析で提出した11のテーゼのうち，先了解（フォルフェルシュテンドニス）の自覚（第1），論争的場面（第9），認識関心ないし認識の利害状況（第11）を浮き彫りにするからであり，また，かかるテキスト解釈がドキュメントのとり出しに終始せず，イデオロギー批判的な問題提起をもはらむからである[3)]。ただ，ペスタロッチ理解を課題にする本論では，ガダマー，リクール，ハーバマス等の解釈学的位層の方法論的意義を予備的に提示する紙数の余裕はないが，テキストを執筆者の投企ないしそこに開かれる世界とし，これに地平の共有にもとづいて読み手の側のそれを重ね合せながらの緊張と融合との作用を了解行為として推進せんとするものである。その限りでは，執筆行為自体が世界における投企とその自己理解の表出過程であるだけでなく，読み行為もテキスト＝他者およびその前での自己の理解の試みである。それゆえ，読み手によるテキスト＝他者の変型を自戒すべきである。他者への主観的意味の投射が心理主義的ロマン主義的な自負であったり，客観的分析といわれるものがイデオロギー的図式貼付の歪曲をもたらすからである。解釈場面をテキスト内部に秘められた心理的次元や，テキストの背後でその言論を制御する要因の摘出場面として設定することは，思想やそれに係わる教育の実践場面には不可

欠だが，テキストのはらむ深層の意味を露呈させるまで，客観化の道を進め，そこから逸脱すべきではない。歴史（生起）的実存的投企としてのテキストは，それより先に世界への反省的関与をしており，その了解を媒介する記述の生産性には，世界の構造基底を顕在化するための「客観化」の道からそれず，その可能なかぎりの前進が要求される。いわゆる文献批判の課題はそこにあり，了解の条件として必要であることはいうまでもないが，かかる条件をみたしながら，投企としてのテキストに投企としての了解が関与するところに，解釈の「歴史性」が生起し，テキストと解釈者の地平の緊張と融合，さらには疎外と同化のまさに「影響活動の生起（史）」が展開する。その限りでは了解操作としての解釈には，認識の客観主義とその絶対性は拒まれており，むしろその多義性を容認しながら力動的に遂行される[4)]。

ところで，実存投企としてのテキストとその解釈行為のかかる場面は，テキストが執筆されていく場合の了解と解釈の生起（歴史性）と構造的に重複するものをもつ。わけても，ペスタロッチの教育的生涯におけるテキスト執筆の動機と過程は，自他の構造場面での実存投企とその了解や解釈をめぐってひとつの典型を示し，それが彼の理論と実践の基底をなし，解釈学的根拠となっている。つまり，彼の主たる著述の主題傾向とその展開は，思想，文化，イデオロギーの諸状況を媒介にしながら，自己理解と他者理解の緊張と融合をめぐる地平を入手していく過程であり，大略以下のごとく位置づけられるだろう。

すなわち，自己理解をA，他者理解をBとすれば，

A_1　＝『隠者の夕暮』（1780）

B_1　＝『リーンハルトとゲルトルート』（1781〜87）

A_2　＝『人類の発展における自然の歩みについてのわが探究』（1797）

B_2　＝『シュタンツだより』（1798）

A_3B_3＝『ゲルトルートはいかにその子らを教えるか』（1801）

A_4B_4＝『白鳥の歌』（1826）

つまり，AとBが相互に交代しながら，セットをなし，しかもAがBに先行して，A_1B_1，A_2B_2，A_3B_3，A_4B_4 のごとく，教育の解釈学的基底構造を構成している。また，各セットはその展開における一定の時期段階を，前・中・後期として示すし，その場合，A_3B_3 と A_4B_4 では，『ゲルトルート』の前半と『白鳥』の後半がA，前者の後半と後者の前半がBであり，一作品に合併して提出した主題内容をもっている。しかも，この前・中・後期のそれぞれに政治・社会・文化の諸状況が顕著に影響しており，前期の農業活動と道徳的な政治経済的結社活動，中期のフランス革命やシュテーファー運動などへの発言と参加をとおした，それらへの反省や批判が，AとBの分離やAへの収斂解消を促すのではなくて，むしろそれらの循環関係を刺戟している。

また，おおまかな問題提起をするなら，A_1 の『夕暮』と A_2 の『探究』にみえる存在論的，社会的な「真理」概念が，A_4 の『白鳥』にみえる陶冶論的教授学的な「真理」に展開し，さらに，その真理概念の設定方法に関しては，A_2 では「状態」と「作品」との関連で「自然の道程」に構造

化されながら，「死の跳躍（サルト・モルターレ）」が真理生起の契機となり，B_3 や B_4 での「メトーデ」や「基礎陶冶」として展開する。これは自己理解をめぐる真理とその方法との緊張対立を人間陶冶の基礎的次元へもちこもうとする，教育学の解釈学的努力に他ならなかった。

もちろん，如上の類型的な方法仮説には，次のごとき疑義が出されるかもしれない。すなわち，自他の理解の構造は，ペスタロッチの思弁的な理論問題であって，そこに実践行為は捨象されているのではないか。仮に，そうでないとしても，理論が先行し実践が後続するのは，彼の生涯の事実に反するのではないか。しかし，解釈学的了解構造は，理論と実践の対比や，解釈に対する実践の先行優位というよりも，理論と実践の基底にあるものであり，その循環は構造の全体と部分の関係にたち，教育的解釈は，その自他構造の把握にむけられた地平構造を保持していく限りでの生起である。また，事実関係としては，後述していくように，B_1 が A_2 に係わり，A_2 の段階にあっても，たとえば，教育実践を希求するペスタロッチを示す92年12月5日（推定）の E. フェルレンベルク宛書簡（B. 699）[5] や，とくに95年10月10日付 F. M. Meyer v. Schauensee 宛書簡（B. 730）のごとく，日付は当初の98年でなく95年が妥当であり（B. Bd. 3, S. 543），そのために仮説設定に不整合をきたすケースもあるが，この後者の書簡にいうように，「知識の流れはあらゆる流れと同様に衝突によって刺戟をうけ，あらわれでてくる」（B. 730）。いわばイデーと実践とは継起的でなく，たえざる緊張関係を内包持続しているのである。

さて，本論の主題領域は A_2B_2 段階の，A_2 の『探究』，しかもその草稿であるが，『探究』成稿の考察への予備だが比較ではなく，むしろ，筆者自身の従来の研究の継続であり，わけてもその「読書ノート論」[6] とは，その時期や資料の特殊性などの点で，類似し，親近関係をもつ。そこで，以下では，まず，草稿に関する戦後の先行諸研究の観点と近年の動向を一瞥し，その問題点の摘出に努める。次に，草稿執筆に至る動機や背景について，心的内実を存分に吐露した書簡で確認し，あわせて，極度に断片的で問題の多いこの草稿の考察主題を抽出し整理しておく。さらに，以上をふまえて，ペスタロッチが著述するさいの視点と方法とをおさえることで，思想形成における主体の視座と方法上の特異さを提示したい。そして最後に，彼が自己理解の危機に直面しその救済を求めながら展開していった社会批判の内容を確証する。

1886年，フンツィカーは，『探究』成稿につき，「著者がその人生観を根底にして思想過程を同時代にきたんなく開放的に語った稀なるもの」，「成熟した人生の知恵の書であり，そうなるだろう」，とその刊行序文で熱っぽく語った[7]。イズラエルのビブリオグラフィーでもその成立過程を述べるが，そこには誤解もあり[8]，両者とも草稿の存在にはふれていない。草稿が陽の目をみるのは，1938年の批判版においてであり，そのテキスト・クリティークと事情説明にはファイルヘンフェルトの手になると考えられる[9] 比較的詳細な解題がある。その後，E. オットーが，ペスタロッチの作品主題を特異な形で総括しているが，そこでの草稿の考証と位置づけは，ファイルヘンフェルトには及ばない。ただ，収録の草稿が成稿の前段でなく，むしろ後半に属し，かつ，「第一草稿」な

るものの存在と紛失を推定している。また，そこから草稿に特徴的な視点として国家的政治的関心から倫理的関心への傾斜と，革命的傾向の軟化とをあげるが，これは全面的に肯んじ難い[10]。

ペスタロッチが『夕暮』から『探究』への過程で思想転換をしたのか，連続性を保持したのかの問題は，1927年を頂点とした精神史的研究やテキストにおける思想内在的な展開の分析のいずれでも重要な課題であった。トイヴィオは，「生の危機」と人間観の視角から専ら精神史的に究め，ペスタロッチのいわゆる三状態を方法的虚構としながら，連続性を結論づけたが，その実証資料として『読書ノート』を重視したけれども，草稿には関説していない[11]。

しかし，この連続か非連続かの問題が，むしろ「破綻」(Bruch) か「修正」(Revision) かの問題として浮上し，ペスタロッチの，いわば「非神話化」論争が提起されるに至ったのは，A. ランクの『政治的ペスタロッチ』(1967) によってである[12]。彼が論決せんとした相手は，政治という主題の共通性からすれば，A. ルーファーや H. バルトであり，とくに方法論の点からして，従来の精神科学的教育学の系譜の，二次大戦後から60年代までの主流を形成した実存論的解釈，わけてもその嚆矢となった W. バッハマンであった[13]。資料処理の上では，『探究』草稿を暴力と不正への抵抗権を根拠づける自由観念を抽出するために利用している[14]。しかし，このランクの場合，社会的行為の場面で主観的意図と客観的機能とが，いかに媒介されて政治的現実への有効性をもちうるかの分析評価では，ペスタロッチの自己理解を基底とした全体構造の枠組みやそれによる政治社会批判の局面が軽視された。また，教育性の吟味に関し，教育行為の了解構造は当初から放棄され，教育の政治への従属ないし還元をおしすすめる形で，ペスタロッチを政治的敗北者と断罪した[15]。

このポレーミシュな画期的論作に対し，いちはやく反応したのは，フレーゼを中心とするマールブルクのグループによる『政治的ペスタロッチ論』(1972) だった。おおむね，彼らのうち，フレーゼ，リュックリーム，ピッペルト，カムパーは対立的批判的な，メスマー，クラウゼ=ヴィルマールは同調的な傾斜を示すが，ランクがペスタロッチの教育と生の解釈の内在的理解に達しえぬ表面的なイデオロギー的図式化をはかり（ピッペルト）[16]，彼の意図と市民社会状況との両者の媒介およびその構造全体の把握には不十分さがあると指摘された（カムパー，フレーゼ）[17]。なかでも，クラウゼ=ヴィルマールは，上記と別の個所でだが，『探究』の草稿と成稿とを全体として把えながら，ランクに対しては，彼が伝統的支配階層と自覚的革命的な民衆運動とを混同し，とくに後者を軽視したペスタロッチ解釈を非難する[18]。彼の視点は，社会史的現実の新資料を旺盛に発掘しながら，シュテーファーでの運動やそれに先行したその地の読書サークル「湖畔協会」(Gesellschaft am See)，貴族体制的なベルンの枢密参事会 (Geheimer Rat zu Bern) などとペスタロッチとの関係に照明をあてたところにあり，この期の彼に保守的変貌をみようとするイデオロギー的研究の方向に一定の疑義を提出した[19]。

しかし，かかるイデオロギー的社会史的研究が，教育学やペスタロッチ研究にとって十分でなく限界をもつことに対して，最近では現代ドイツの教育学動向の受容やより精細なテキストの踏査で補充せんとする傾向を生み，そのことは次の三種の学位論文が端的に示している。まず，ビルクは，

『ペスタロッチの教育思想の経験的基盤』で，「歴史的次元」と「現代教育学での経験の役割」とを柱にして，ペスタロッチにおける経験概念とその事実形態の展開との連関を『ゲルトルート』の時期まで追跡する[20]。これは，新鮮な視角であり，新資料の紹介等をとおしてペスタロッチの社会史的地平を広げているが，政治的局面と人間をめぐる哲学的次元への留意は少なく，『探究』は考察の対象から除外されている。このため，研究における近来の論争的場面への関与に消極的になり，彼女自身が前提した精神科学，批判的合理主義，解放理論の，教育学動向の三類型をペスタロッチ把握に投射する困難さないし不成功を示すところも否み難い。

次に，スイスのブリュールマイアーは，精神史的把握やイデオロギー分析のもつ，影響関係の無際限に近い遡源や外在的図式化ないし批判からのがれるためにも，思想のいわば自己展開ないし受容を踏査する[21]。このため，テキストには忠実で，草稿のもつ意義を積極的に評価するが[22]，ペスタロッチの「人間自然」の把握とその変遷を追うという旧来の観点からは十分脱けきっていない。

最後に，ボルンの『ペスタロッチの人間学と教育学の統一――「探究」の自由概念と1799年と1801年の教育的著作――』は，あくまで主題解明の補助資料としてだが，草稿を最も頻繁に利用したものである。彼女はペスタロッチの思想における教育と政治の問題を，従来のごとく，連続か非連続かでも，破綻か修正かでもなくて，「媒介」の問題として把え，そのための自由概念の論及に草稿を10数カ所引用し，統一への手だてとする[23]。そして，これをいわば自由の人間学としながら，もうひとつの課題としての人間学と教育学の統一課題を，草稿でのソクラテスとペスタロッチとの問答部分に示される「強制と努力」の主題を中心に30個所近い引用で論じ[24]，A. フリットナーやH. ロートの領域統合的な人間学的教育学理論の導入でまとめようとする。

かかる研究動向は，ペスタロッチ理解とその研究に次のごとき対立的な問題局面を提示している。第一に，テキスト中心か方法論中心かの接近の差は，前者は思想構造を忠実に摘出し，その形成主体の実践的動機理解に寄与するし，後者は新鮮かつ尖鋭な分析視角で対象を客観的理論地平にすえるが，その場合，内在的理解か歴史状況への組みこみによる位置づけかの差は，その功罪を逆対応的にはらみ，双方への批判的通路をもちえぬ対立か閉塞へ陥る危険があり，全体像は入手しがたい。第二に，その問題意識と方法論における人間学的傾向と社会科学的ないし社会史的傾向の二次大戦後の両潮流では，なかんずく後者がきり拓いた領域は評価されるべきだが，ペスタロッチにおける人間論と社会論とを相互に否定的な対立とし，そこからして教育論ないし教育概念の内包，枠組み，次元を対立的に固着させた問題点があった。ペスタロッチの全体像は，第一の問題点の単純な併記では入手されぬし，彼の教育概念は，第二の問題点の特殊化からは汲みとれない。しかも，これらの問題点が80年代後半から90年代の彼に最も典型的にあらわれており，そこに現代の研究関心が集中する理由もある。したがって，本論での課題のひとつも，彼における危機の問題を社会体制としてでも心理機制としてでもなく，それらが相互に交錯する地点にすえ，主体の自己理解と思想形成の契機としてとらえること，そして，社会との関係にみとおしをつけることにある。

II. 成立事情と内容構造

18世紀最後の四半世紀は，市民（ビュルガー）たることを公衆（プーブリクム）たることで証明し，上からの体制的啓蒙と対した形での「公共性の構造変容」がみえはじめていた。その一例として，読書サークルはペスタロッチの周辺でも空前の活況を呈し[25]，彼自身も，執筆活動と平行して85年後半から翌年を中心に，97年までにわたる『読書ノート』を作成している。ただ，これは著作家ペスタロッチから離された読者ペスタロッチとしてではなく，道徳の教化や農業と手工労働の推進を目標とする団体に係わりながら，『リーンハルト』の著者として執筆活動の新しい展望を求め，社会批判，経験の人間学的構造，および習俗の人間学といったものをめざしてすすめられていた[26]。そして，85年12月 K. ツィンツェンドルフ伯に宛て自身の考究課題として，「…自然（本性）に固有の根本衝動と，人類が現代までの諸状態で幸福や不幸になってきたいっさいの歴史と経験の探究による，真の人間指導の一般理論（die *allgemeine Theorie der echten Mentschenführung*（ママ） durch Nachforschungen über die eigentlichen Grundtriebe unserer Natur sowohl,（ママ） als über die Geschichte und Erfahrung...）をはっきりさせること，これを目下の自分の計画として着手した」(B. 648)，としたためた。一般にこれが『探究』の着想といわれるものだが，この点からすれば，その第一草稿は紛失し，批判版収録の草稿は第二以後の草稿となる[27]。その後の10年の経過のなかで彼は，ひとつにフランス革命下の政治状況への立場決定，ふたつに時代の思潮への対応とで，同調的依存的傾斜と反発的抵抗の葛藤ないしアンビヴァレンツのなかで揺さぶられていく。

92年初頭段階で了えていた第2版『リーハルト』改筆の意図は，「その幻想図（トラウムビルト）」(B. 690) を克服し，「善良なサン=ピェールと同列に語る」(B. 698)のでなく，「父性的支配を民衆教育に有効に影響せしめること」(B. 690, cf. B. 689) にあり，「純粋な貴族主義の救済」(B. 698) だったと，G. v. Hohenwart 伯や啓光団（イルミナーテン・オルデン）の同志だった F. Münter，さらに E. フェルレンベルクに告げている。そして，最後者にはペスタロッチ自ら自分が同調する政治的立場を「民主主義者（デモクラーテン）の恩恵と寛大さに支えられた貴族主義（アリストクラティスムス）」，「大いなる市民主義（シヴィスム）」(B. 699)だ，と表明した。また，これと同時期にフランス革命委員会からの名誉市民称号贈与への返礼状の，しかも差出し事実確認不能で修正と書き加えの多い下書きには (B. 3, S. 523)，「古風な共和主義者（アルテ・レプブリカーナー）」と自称し，『リーンハルト』初版を「民衆（フォルク）に関し民衆のために語りしもの」(B. 700) という確信と自負を示した。さらに，先のフェルレンベルクには，共和主義体制の功罪両面を熟知すると告げ (B. 696)，「目下肝に銘ずべき真理を興奮の嵐のなかのフランス人民に効果的に語りうればと思うが」，「自信」も「知人」もなく (B. 696)，事実，「フランス人とは直接間接いずれの関係ももっていない」(B. 697)，という。ここには政治的立場をめぐって，その用語の相手による使い分けというよりも，葛藤の渦中にあるペスタロッチ自身がいる。

また，彼の近辺の動静もフェルレンベルクがいたベルンを中心にその貴族主義的保守体制や，そこへのフランスからの亡命者，Mallet du Pan による反革命論議とそれへのフランスからの反批判

があり（B. 698），ペスタロッチのチューリヒでは，彼が反革命的と同義の「国民主義的」（natialisch）になったという噂が流れた（B. 698, cf. B. Bd. 3, S. 521）。ただ，ペスタロッチもフェルレンベルクも，革命下のフランスの教育については，旧来に比しその制度的開放性がもつ意義を評価していたのは，後者の別の証言で判明するが，同様にその彼が語るごとく（B. Bd. 3, S. 524），革命へのペスタロッチの否定的評価は，ひとつに，政治行動における権力性と倫理性との背理，またはその分離ないし対立の止揚への不到達，ふたつに，伝統との断絶，要するに彼が志向する実際的かつ倫理的な「徳の共和国」には「恐るべきフランスの怪物」はなじまぬからであった（B. 702）。

既に『読書ノート』以来，ペスタロッチには時代の知的世界への関心は高まっていた。92年の春から初夏にかけての，ライプチヒを中心とするドイツ旅行は，ヘルダー，ヴィーラント，ヤコービ，ゲーテ，クロプシュトック，シラーなどとの会見を欲したが，その実現は諸説にかんがみても，不如意で（B. Bd. 3, S. 517）[28]，前三者以外は彼に対して無関心ないし消極的な態度や評価を示したし，当時世評が高く，かつ『読書ノート』でも念頭においていた E. Platner には適当にあしらわれた（B. 695, cf. B. 712, 756, 759; B. Bd. 3, S. 712; 12. 357）。ペスタロッチは，二人の女性に宛てたと推定されている手紙の下書きで，ドイツでの実感を最上級の表現で吐露し，「学識」と「審美性」を欠く自分としては，「洗練された人々に比し死者のごとく」であるとしながらも，彼らの「生ける天使のごとき影響力も…コメディーであり」，「チェスをみるサル」のごとき「百姓」である自分もドレスデンの華麗さに「嘔吐すべき退屈さを感じ」，「市民状態の堕落をみた」，と書いた。「現代の自由概念の悪化」は，「学識者と哲学者の状態」に及び，「自由のエゴイズムを肯定し，貴族のとりまきになる教授たち」，と念頭にプラトナーをおいて非難反発した（B. 694 f.）。このドイツ行きを「有用だった」（B. 694）というのは，範とすべきものかの地になし，と認識しえた「成果」の表明だった。

かかる哲学者の体制癒着とその高踏性は，民衆のために民衆を語ろうとするペスタロッチから最も遠く，その要求は一層つのった。それは，彼が抵抗する講壇やラバターを評して「机上の学問」（B. 712）といったものであり，「純粋な哲学」（179. 4）であって，彼はそれらに「無知だし関知もしない」（169. 33 f., 179. 40）。また，講壇的ないし理論的概念としてよりも，政治的イデオロギー的傾斜を強くする通俗的世界観ないしはその心理学やフランスの政治動向をさして，「サンキュロット的一面性」（sansculotische Einseitigkeit）をもった「一般哲学」や「権力の一般哲学」とし，それに強く反発した（B. 715）。逆に，自身の志向する「思考法と体系との全体連関」（ganzer Zusamenhang meiner Denkungsart und meines Systems, B. 715）は，「非哲学的」であり，「なにものもなしえぬ時代の冷たい哲学とは逆に…人をその心情に接近せしめる感情を喚起する可能性」（B. 754）であるとした。

この行程は，「経験と感情」による執筆活動となるのだが，92年末から翌年前半にかけての彼は，混乱と激情にとらえられ，停滞か前進かの瀬戸際に立っていた。書肆主 G. J. Goeschen に，「目下極度に放慢になり，ものは書けないでいる」（B. 703），と告げている。とくに93年6月7日同時にしたため Reventlow 伯夫人 Juliana とニコロヴィウスとには，前者に対して，「人生の道に萎えた

無力者が盲の人にこういわねばならぬ。私を君たちの背に負ってくれ，私が道を教えるから，と。…しかも世の欺瞞を沈めこませる希望が湧いてくる」(B. 707)，と告白し，後者には，「失われし人生」，「落ちぶれかつ混乱せし夢幻のなかの人生にあって自分に固有の心情的真理を見出す」，とし，「私自身のなかの，己れの行為の廃墟のなかで，自己を保持しているものをすべての人に与えうるようになりたい」，と書いて，「自分の経験の保有者，攪乱させれた仕事の継承者になってもらいたい」，と激しい自己告白をする (B. 708)。この二通では，それより4カ月後の10月1日，ニコロヴィウス宛の有名な書簡が諦観的気分で「世の泥沼」(B. 712) を語るのに先行して，絶望と「希望の大地」(B. 708) を併存させるパトスのなかにペスタロッチはいる。

ただ，しかし，上の10月1日の書簡の心情が彼に執筆を促す契機となっているのは，その後の11月15日の E. フェルレンベルク宛書簡 (B. 713) で明らかになる。すなわち，『リーンハルト』第2版では「ボンナル村年代記」と計画したその第4部は放棄し (B. 712, 4. 559, 602)，「私の政治哲学」，「私の政治的基礎」を求めてきたが，一方で「フィヒテがそれ (『リーンハルト』) にカント哲学の基本命題にすえた書評をし」，ペスタロッチ自らは，「生起したるもの，生起すべきものについて自己自身に純粋感情を保持せねばならぬ」，と考える。これこそが彼の「方式(マニール)」の原理であり，「自分にはあらゆる単純な啓蒙的文章は労多く難儀した努力の結果だ」，と告げ，「仕事の前進に満足し」，「希望の充満」を報じた (B. 713)。彼がかかる主題の焦点化を進めていくにしたがい，その「政治的主題」は制度的イデオロギーの次元から遠のく。そして，「私の人生を導いている根本問題」として，「動物的自由を焦がれ求める荒廃には，身分階層の差はなく，むしろ心理的には同一の視点から出ている」，としながら，その「著述の過程」については，「私は愛と好意の本質をあばき，動物的暴力性に対抗する人間の力の本質へ深く入りこむ。…民主主義が虚偽であり，いずこにも現存しない状態であることを示す」(B. 716)，とする。つまり，政治的主題への彼の視座は，人間学的次元にすえられ，それに執筆者自身の主体の生解釈を重ね合せる方法で接近するのである。かかる視座では，「心理的歴史家」(10. 135) として執筆した革命論『是か否か』を深め体系化して『探究』へ向かう方向がみつめられている。上の言述は，書簡という非公開的形式のなかでのものだが，政治行動に道徳的意義を付与できるかどうかといった政治への非政治的アプローチというより，政治行動への逆対応であり，その意味では『探究』はその底に「私の政治哲学」(B. 713) というより，「私の反政治哲学」に近づくものを秘めている。

94年1月，E. フェルレンベルクとラバターに「著述への没頭」を告げ，前者に宛ててこう知らせた。「ヨーロッパ人類の市民的気分について。時代の一記念碑」と表題を予定した革命論が深みを欠いて表面的であり，それを拡大して前市民的状態ともいうべき「封建体制」や「奴隷状態」にも妥当する包括的人間 (自然) 論を構想し，そのタイトルを『人間の市民的権利の論争中の諸見解の間での人間性の媒介』(*Darzwüschenkomfft der Menschennatur zwüschen die im Streit stehenden Meinungen von dem bürgelichen Recht des Menschen*) と想定した (B. 719)[29]。これが，『探究』の前段となるものだが，わずか2頁で放棄されている (10. 251 f.)。それより約1年後，日付は第三者

の記入だが，95年2月7日の段階で H. K. Escher に送る「計画」[30] ができた（B. 727, cf. B. 3, S. 408）。

まず，以下において，この草稿全42節の各節の主題内容，収録個所，（　）内数字は成稿（12. 5〜166）との対応があればその個所を示す。なお，「　」内は，草稿でのペスタロッチによる直接標記であり，本稿との対応個所の指示は，主として校訂者のテキスト・クリティークによっている。

『探究』草稿（*Entwürfe zu den „Nachforschungen"*）内容一覧

1. 「著書の修正．1795年．ありうべき誤解<の当然さ>と解明」（*Revision des Buchs <Recht> <Re> und Erleuchtung über ein mögliches Mißverstandnis*）．著述論．政治社会論．169. 1〜175. 5.（6〜7, 13〜18）．
2. 著述の方法と主題の意義（ほとんど抹消）．175. 6〜19.（6〜7）．
3. 自然の矛盾の探究．主体的真理（自己理解）のための経験の探究．175. 19〜176. 73.（6〜7）．
4. 自己と公衆との具体的関連．著作の究極目的と論述方法．176. 38〜178. 28.
5. 「註釈」．社会的状態にたつ論述の問題点．178. 30〜179. 32.（6. 29 ff.）．
6. 民衆の習俗に対する権力の術策．179. 33〜181. 6.（16. 31〜17. 30）．
7. 旧体制勢力と新興商業資本家との癒着および支配（ほとんど抹消）．181. 6〜182. 2.（24. 16 ff.）．
8. 「収奪」（Usurpation）．幸福論（見出しの記述なし，ただし，29節で奪取（Beraubung）として体系化）．182. 3〜35.（27 ff.）．
9. 「キリスト教」．I（Ich）と S（Sokrates）との問答．「神的火花」としての知恵（ほとんど抹消）．182. 36〜183. 17.
10. 人間世界への侮蔑．183. 18〜184. 14.（50. 26 ff.）．
11. 社会体制の動揺および権利と正義の喪失．184. 15〜186. 42.（51. 30 ff.）．
12. 「最初の人間状態の観察からの帰結（コロラリア）」．道徳，所有，権利，国家，宗教等にわたる29項目（ただし，展開の連続性はなし）．187. 1〜188. 27.
13. 「明日への控え」．家族関係と自然感情．188. 28〜44.（58. 2 od. 59. 3, 62. 36 ff.）．
14. 子どもと民衆（以下，20節の追加と22節の暫定的総括をはさみ24節まで討論様式，問答体を使用）．189. 1〜190. 18.
15. 国家と国法との課題およびその限界．ペスタロッチとソクラテスとの問答．190. 19〜192. 7.
16. 権力の問題性．192. 8〜35.（58. 2〜28）．
17. 生活と労働における強制と努力の意義——糸紡ぎの例．192. 36〜196. 40.（58 ff.）．
18. 生活における自由と強制．17節の継続．196. 41〜201. 46.（58. 1〜59. 23）．
19. 17節の継続．202. 1〜49.（58. 1〜28）．
20. 17節の継続．203. 1〜33.（59. 16〜37）．
21. 人間の自然的，社会的，個人的境位．203. 32〜204. 32.（59. 19〜60）．
22. 自然状態と社会状態との克服．204. 33〜205. 8.（60. 13 ff.）．
23. 真理と権利．205. 9〜34.（62. 33〜66. 36）．
24. 真理と権利との社会的現実．23節の継続．205. 34〜206. 24.
25. 人間の「自然的連関」に関する16命題．206. 25〜208. 5.（67）．
26. 人間の「人為的連関」．208. 6〜19.
27. 自然権（法）の心理的基盤とその限界．208. 20〜210. 6.（74. 3〜75. 30）．
28. 社会的人間の「硬化」．210. 7〜214. 41.（90. 34〜92. 19）．

29.　三種の人間像における自由とその奪取．214. 42～218. 13.（100. 28 ff.）.
30.　社会的人間の市民性と大衆性．218. 14～221. 35.（103. 26～105. 15, 100 f.）.
31.　道徳の個人性．221. 36～222. 30.（112. 38～114. 10）.
32.　「前節への追加」．道徳性と好意および義務，政治．222. 31～227. 43.（115. 9～121. 26）.
33.　「<<自身の>人類の作品としての私とは何か>」．228. 1～229. 4.（124. 11 f., 134. 13～17, 138. 23～27）.
34 a.　自然と人類の作品，および内的向上．229. 4～28.（122. 17～138. 27）.
34 b.　真理と権利の保障．229. 29～40.（122. 17～138. 27）.
35.　人類の作品としての私と名誉，支配，服従，主人と奴隷，圧政，野蛮化；自然，人類，個人の作品としての私．229. 41～235. 12（138. 14～140. 30）.
36.　人間の矛盾．235. 13～236. 49.（159. 16～162. 13）.
37.　自然，暴力，法の三状態．237. 1～39.[31]
38.　社会関係の矛盾に関する14項目の問題提起．281. 1～238. 21.
39.　社会的不平等．238. 22～35.
40.　聖なる権利感情と権力．238. 36～239. 16.
41.　権利意識の発生と権力の不可避性．239. 17～240. 7.
42.　民衆論と自己告白．240. 8～241. 31.

この草稿には，校訂者のテキスト・クリティーク（Bd. 12. S. 554～561）によれば，中途放棄や散逸部分もあり，抹消個所もかなりの数にのぼるが，配列順序は，上の一覧の成稿該当個所も示すごとく，37節以下と，それ以前の一部不明ないし非該当個所や，1節後半の記述の2枚の訂正紙手稿などを除き，ほぼ成稿の記述に沿って整理されている。概略だが，12節の「帰結（コロラリア）」は，成稿第1部ともいうべき「わが個人性の目に映る人間の像（*Bild des Menschen*）」の部分（44～57）の帰結であり，25節の16の命題は，「本質的視点の詳細規定」（67 f.）にあたり，33節が「本書の本質」（122 ff.）の末尾の一部になる。全体としては，該当個所とその分量配分は，きわめて不均衡である。このことは，シュプランガーによる成稿主題の一覧化に徴しても，好意，愛，宗教の叙述は31，32節に散見される程度だし，利己系列も35節で標題化されたものは，当初は「名誉」と「支配」，訂正紙で「服従」を加える程度で，後半の利己系列（132～149）の考察項目18に比して少く，利己と好意の二系列の個別主題の考察よりもむしろ社会的状態やそこでの「作品」の前後の移行や転換の叙述の占める割合が草稿には高い。ここにもペスタロッチの執筆時の位置とその経過，さらには当面していた課題の一端が示されている。ただ，主題上関連のある『自然と社会の状態　断片』（1783）や『人倫概念の成立』（1785/86）などに比し，その抹消も多く，その完成度ははるかに低い。また，草稿は，激情的な筆致をみせながら，それだけにメモの域を出ず，論旨の展開に飛躍も多く，訂正紙，再訂正紙の貼付が目立ち，その数は20回近くに及んでいる。これらの点で，この草稿は，一方では読解への興味と関心をそそるが，他方ではその困難や危険をはらむのも事実である。

III.　思想形成における主体の視点とその方法

「私は，この書物がその手に渡されるはずの公衆（*Publicum*）が冷静かつ非党派的に判断されてい

ない＜1795＞年のことを隠すわけにいかぬ」(169. 4〜7)。「私自身と，世界の行程をあるがままにみつめるという私の方法(アルト)は，現代，冷静かつ非党派的には判断されていない」(169. 14 ff.)。これは，33節以外他節にない形で大書された第1節の標記「著書の修正．＜1795＞年．ありうべき誤解＜の当然さ＞と解明」(169. 2 f.) に続く，冒頭部分である[32]。ここにあるのは，沈黙か発言かといった選択の迷いや状勢との単なる不適合ではない。むしろ時代とその文化のインパクトで，自己定位の困難を看取したときの，自他の理解に係わる危機というべきだろう。歴史と文化の一定の有限的条件のもとで，実践課題を実現しようとするとき，その条件が，たとえば伝統の瓦解や習俗と言語の指導的傾向の交代の徴候によって変容し，社会像は揺らぎ，コミュニケイションの閉塞状況へと実践者は追いこまれるからである。たしかに，著者と読者，テキストと解釈者の関係には，話すと聞くの対話関係や書簡のごとき私的限定をもつ往信と復信の対応関係はない。しかし，それだけにペスタロッチは，その結社活動への参加，『シュタンツ』や『ゲルトルート』における書簡様式と6300余[33]に及ぶ私信が示すごとく，時代の知的交流のスタイルを有し，それが公論形成と公衆の浮上へ展開するところにいた。そこで「公衆」に語りながら，社会的言論大衆としての公衆からの「ありうべき誤解」に直面するのだが (169. 3)，著者ペスタロッチには，体験表現の概念的言語が自身の生の全体性を表現しえないとみるゆえの葛藤があった。いってみれば，社会関係の深層構造は，欲求・関心・規範をめぐる主体の抑圧と解放の実践課題をもった葛藤関係であり，問題は論理で止揚さるべくもない。そこで，「この原稿が＜一時的な作品でなく＞，私の人生の結果と内的連関をする」(169. 17 f.) ものを，弁明ないし合理化してうしろむきになるのではなくて，展望を開示する投企とし，葛藤のもつれを解かねばならない。「自著と私自身とを再検討 (revidieren) せねばならなかった」(169. 14) ゆえんである。

このため，彼は，「最も本質的な概念を生活性をもった一面性 (lebhaffte (ママ) Einseitigkeit)[34] におく (169. 22)。その「＜＜生活性をもつことでの(レーブハフティヒカイテン)＞当初の荒書き (erste Hinwerffen (ママ))[35] が，たとえ一面性と無秩序のカオスであった＞」(169. 25 f.) としても，「私自身と私が事態そのものにもつ関心の像を生き生きと刺戟して，長年自分の表現にあった無秩序と一面性を発見せしめる」(169. 26〜30) からである。ここで注目されるのは，テキストの方法として「生活性」ないし「生活性をもった一面性」のなかでの自己理解の，先了解的構造と先入見の積極性を観取し，経験の具体的世界へ踏みこんでいることであろう。認識の無前提と客観化は，予断の排除，実証的記述，非イデオロギー性等を標榜するだろうが，認識者の社会学的被拘束ないし帰属は，決して自然的所与ではなく，相対的自律を保持するにすぎぬ。むしろ，かかる社会的認識が直面する困難に先行する先了解の存在論的構造にあって，相互主観性のなかでの自己理解の把えかえしこそ「生活性をもった一面性」の内実を汲みとらせる。時代の「一般性の哲学」や「公衆」の論議の克服には，自己理解および主体的関心を発掘し，それを自己課題とした内的誠実の持続を「著述の方法」とすること，「それ（生活性もった一面性）は，私が世界の対象をみる方法と強く係わり…よし本書がその一面性を解消しうるとしても，そうあるべきではないのである」(170. 12 ff.)。むしろ，「書き方を学ぶ」とは，一

方でかつて『リーンハルト』に向け「農民言語の練習」(B. 517) をして，民衆の真のラングと概念語とのすき間をうめ，後者の前者への介入ともいうべき「時代の哲学」の傾向を排して「民衆哲学」(3. 341) を提示したことに加えて，今や，自他の理解の地平で生活性の経験的基盤を発掘し，相互主観性ないしその先了解的構造を入手することになった。したがって，「私自身が帰趨すべき真理に帰還することは本質的だが，同様に私が立つ地点も，なにを望むとしても，隠蔽されてはならぬ，これもまた本質的である」(170. 18〜21)。著述の営為はかかる真理の問題へ向けての，「時代の真理でなく，私の真理」の表出であり，「各行に私自身の刻印を失ってはならない」(170. 16 f.)。

「私自身のなかのあらゆる真理の直観方法 (Anschauensart)」(171. 5 f.) と呼ぶペスタロッチの著述方法は，体制の秩序とその方策のみを語り，あるいは「民衆を革命的精神へ仕むけると主張し」(171. 15)，「純粋真理より優れていると声高にしゃべる」(171. 24 f.) 著作家たちの目的や態度とは異なる。いわゆる啓蒙主義的イデオローグとその教化的文書の類は，自らが寄与していると考える「社会的解放」とは逆に，いわば支配の技術化を支えるイデオロギーへの動機づけ機能を担っているのを自身看過しがちである。ペスタロッチが著述でめざすものは，そのイデオロギー性の暴露にはなく (174. 45 ffx.)，むしろ彼が状況化された自己の現実原理に当面してそれを超克せんとする内在化された自己が，独断と神秘化の道に踏みこむことなく，いかに階層の差や「精神発達」の差異をこえて妥当するか，また，著述におけるその「直観方法」が「世界の事態」を説明しうるかどうかにある (175. 20〜28)。そこで，自己および，「環境と素質」(175. 29) と表示する社会階層と発達段階の三者が個々の領域とその相互間で現象する「矛盾の本質」と「本質の矛盾」を探究せねばならない (175. 35, 176. 39)。これは「純粋原理」や「基礎概念」からの形式合理的な演繹ですすめるのでなく，「世界の諸経験が個人にもたらす諸々の印象から出発する」(176. 1 f., cf. 177. 5)。しかも，「その展開は…秩序のなかの真理を，再度無秩序のなかで把える」試みとして遂行され，「個人の欠陥と個人の回帰に何が係わるか」，といった否定的事態への問いかけで進められる (176. 7〜10)。

それには感覚と関心が条件となり，これらのみが「自己固有の真理へ，自己の経験によって導く」(177. 42)。また，「実践的に形成された個人の直観方法」(179. 7 f.) にもとづく限り，「自己固有の言語の使用」へ向かう (177. 27 ff.)。逆に，感覚ないし感情としての「自然」に注目留意せぬ「洗練された著作家」の「時代のことば」は，ペスタロッチには著述への「補助手段としても使用できない」(178. 10〜15)。あらゆる文化段階の人間と共通だとする彼の方法 (176. 27 f.) は，いわば文化の機能主義的基底にたち，認識主観に経験的具体性を付与せんとする方向をとっていく。こうしてこそ，「個々の固有の真理の追究」を「実践知」たらしめ，個別的特殊性をこえ出るであろうし，著述がその「長さと混乱」のゆえに欠陥をもつとしても，人為と自然，政治と道徳などの対立のなかで「世界の真理へのささやかなる寄与」をなさしめる，と考える (179. 10 ff.)。以上が草稿の出発点にあったものである。

ペスタロッチは，『シュタンツ』と『ゲルトルート』では書簡形式をとったし，小説『リーンハル

ト』での「私」の挿入（2. 352）や両三度の自伝的執筆をし，『探究』も「私とは何か」の問いを基軸にしている。この草稿での「私」は，まず，「私とは何か」の問いの主体，探究者としての「私」，次に，その探究の対象となる「私」であり，さらに，政治社会的実践に傾斜する不特定の「公衆」でも特定の私人でもなく，さしあたっては読者の前で理解と共鳴と求める「私」である。これらは，啓蒙主義の一般化への傾斜と自伝文学の興隆との潮流のなかでの選択の問題であるのみでなく，認識主観，実践主体，市民としての公と私の対立，といった問題をはらんでいる。このように彼の主要作品はいずれも自己を語り，自己の像を投映して造型するのだが，そこには当初からの学問的生起でなく，むしろ意味の設立を志向する教育者が被教育者の前でおこす前学問的な自己理解の実践契機があり，挫折のあとに自己更新していく前学問的な実存投企の位層に立つ。いってみれば，テキスト執筆における実践的真理は，他者の前での自己理解への共同知（Mitwissenschaft）として解明されるのであって[36]，その点でも『探究』の占める位層は根源的である。

草稿は，かかる過程や立場での習作だが，いわゆる自然，社会，個人の三状態を歴史段階や個体の発達段階に該当させて考察し，それらの否定と保存とを内包した同時性ないし存在の弁証法として展開される。その意味では，第二段階は第一段階の，第三段階は第二段階の，それぞれの否定と保存との止揚形態だし，かかるものとして全体的自己遍歴をする。「私とは何か」の問いは，体験をその経過性において記述し懺悔するのでなく，現実の結果としての経験を可能性としての経験に包摂しうるところで究明され，全体性として言述することであり，そこから他者との関係や歴史課題への展望を浮かび上らせるのであって，自然概念の導入もそのための指導契機であった。たとえば，「正義不正義の判断」は，「人間の権利」の何たるかを，そして「人間の権利」の何たるかは，「人間自然」の何たるかを条件とする。しかも，この「人間自然」は，正義不正義の行為の認識によって把握される。ここに，三者は循環関係をなすのみでなく，価値と反価値が可能性としての自然に包摂されるゆえんがある。ペスタロッチ自身の表現を用いれば，「人間の全行為はその自然との格闘にあるかにみえる」（202. 7f.）のであり，自然のかかる把握は，ついには，歴史的限定をもつ市民や公衆を分析対象とすることから離れしめ，さらには，「人類」(Menschengeschlecht) をも抹消して，「大地の人間」(*Mann der Erde*) や「大地」Erde) を導入することにもなる（183. 25 ff.）。この点からすれば，著者＝「我」に対応する読者＝「汝」は，一貫して市民や公衆としてのそれではなく，せいぜい半ばのものでしかない。これらは，あたかも現実の自我が衝動と超自我に構造化されているごとく，第一，第三段階の動物的自然と個人的道徳との中間物ないし過渡だからである。そして，このような著者―読者関係の言述では，前者の後者への啓蒙教化意識はむしろ除外されていく。敢えていえば，「希望」の形で提示され，その「終末論的展望」[37]を理解しうるのは，成稿のエピローグにみえるごとき，全体的自己遍歴を了解しうる「旅人（ヴァンデラー）」であろう（166）。かかる者は，草稿の構成に即していえば，15～18節で判明するのだが，第9節に「キリスト教」と標記したなかでの登場人物，I（私）がS（ソクラテス）に告げる「わが自然の神的火花」（göttlich<keit>*en*（ママ） Funken, der in meiner Natur ligt（ママ）, 183. 1 f.）をみた者の謂である。逆にいえば，「人間のことばの

神聖な世界への哄笑」(183. 32 f.) と かかる「聖性を剝奪された権力が聖ならざる哄笑の永遠に晴れぬ暗闇で織る究めつくしえざる織物」(184. 11 f.) には手をふれぬ者の謂であろう。それのみならず，かかる者はそれを表出する著者としても，それを読みとる読者としても，概念言語の論述形式では内実を伝達し聴取することはできない，と考える。ここに，本質的視点の究明の必要とその言語化の可能性とを問いながら (175. 14 ff.)，表現形式としては，問答と隠喩や象徴を用いる理由がある。

この草稿での15節以下数節にわたる問答形式が，プラトンの『国家』の影響下にあることは，その登場人物や主題から推定できる。そこではまず，ソクラテスの論題提起の形で国法と道徳的自然の対立葛藤のテーマから開始され，次の「強制と努力」の主題は，前節14節でメモ風に記されたごとき民衆と子どもの問題 (189. 1 ff.)，あるいは成稿でのごとき社会的結合や合法的権利の問題としては限定されず (58. 21 ff, 142. 23 ff.)，むしろ社会的自由と個人的自由の問題，理性と情念の対立の問題，さらにはキリスト教的神秘主義的禁欲とギリシア的自然主義的な「生の歓喜」の問題のごとく，対立的見地のるつぼの観を呈している (191. 51 ff., 195. 21 ff.)。そこには，ペスタロッチのいわば思想実験の意図と足跡があり，自分をソクラテスの前におき，双方の口頭言語を積み重ねていく方式には生動性と緊張がみなぎっている。このことは，テキスト・クリティークが示すごとく，息子ヤコープの筆蹟，全体に及ぶ加筆訂正，貼付紙，ノンブルのうちかえ等からも汲みとれよう (Bd. 12, 556 f.)。しかも，この問答は，一部が成稿では，「本質への移行」と「本質的視点の最初の表現」との中間に政治制度論として挿入されることから推しても (62〜66)，論争色を濃くし，かつ思考の原初形態を示すが，もはや，かつての『クリストフ』でのごとき啓蒙教化の意図はなく，心情の吐露と概念的論述との中間型を示している。さらに加えるなら，「自分の思考方法と体系との全体連関」(B. 715) をめざす『探究』の方法としては，後期のごとく彼の固有性ともいうべき心情の発露に求めえず，また，たとえば，『ゲルトルート』における J. R. Fischer によるカント哲学による総括 (13. 204〜209) や いわゆるレンツブルク講演『基礎陶冶の理念』[38] (1809) における J. ニーデラーのロマン主義的再編成ごとき，他人の概念化によるべくもなかった。そこにも彼が隠喩を多用するもうひとつの理由がある。

たとえば，成稿「自著の本質」に対応する草稿第 33 節の冒頭は次のように表現される。「私は，人類の作品としては，アルプスの頂から小川に入り，海へと流れこむ水滴である。目にみえざるひとつの価値なき存在 (ein nichtiges Wesen) が岩塵にまみれ，＜自分がでてきたはてしなき山の裂け目をとおってしぶきをあげながら流れこむのである。そして，私は，ときにほとばしり，ときにおだやかに波だちながら，澄みきった湖やぬかるみの沼にとどまりながらも，流れつづけ，最後にははてしなき海へ＞，自分の最期をみる死の淵へとひきこまれて行く」(228. 4〜12)。このように，対象化された自己の様相は概念にではなく隠喩的表現に託される。これは，既に『リーンハルト』のなかで一少女の限界状況を描くさいに使用した手法だが (3. 120〜124)，人格分析のさいに自然形象を用いる傾向がみられ，しかも，これらの場合共通してパトロギッシュないしネカチブな情況

に対するパテーティッシュな接近が，隠喩的擬人的言語となってあらわれる。それは，既に定着した社会的通念の境界をいわば混乱せしめ，それを超える機能をもつし，上の引用などは，対象の再把握に迫るための方法として，いわば発見的虚構であろう。彼は「ひとつの世界を開く」べく，その投企としての了解・解釈を造型せしめる可能性を，概念の狭い規定性から解放して隠喩的象徴的表現の位層にすえる。ただ，彼の思考過程からいえば，隠喩ないし象徴が概念化のあとにくるものという確認ないし一義的規定は困難であって，むしろ，概念化に先行する形で自己の想像力の心像を投入するか，あるいはせいぜい概念化の断念の結果として，かかる方法をもちこんでいる。

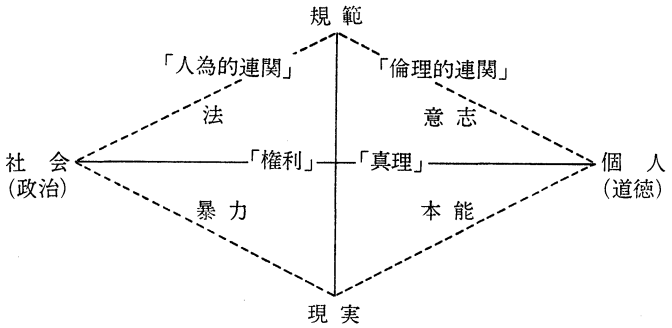
また，コメニウスやフレーベルなどの教育の発想とも共通する特徴だが，形成的なるもの一般がしばしば植物のシンボルで表現される傾向がある[39]。「萌芽」をへて「若々しく生きている木」が「成熟しきった木」となり，「木の実を結ぶ」(230. 26〜33)。逆に，民衆は社会的暴力や不正義によって「落雷にひき裂かれたかしの木」ともなる (239. 38, cf. 186. 36 ff.)。とくにペスタロッチの隠喩的擬人的表現に顕著な特徴は，告発し批判する社会的不正義の当の対象をカムフラージュしながら，読む者をして容易にそれを連想せしめる言語戦略にある。この場合は動物アレゴリーを多用し，支配と服従，収奪と被収奪の関係を「私の社会的権利のメルヘン」(234. 9) としながら，キツネとメンドリ，オオカミとヒツジ (180. 23)，ライオンとロバ (234. 32)，コウノトリとカエル (233. 20 f.) などでもって描く。これらは，97年の「わが思考の最初の基礎のため（の比喩）」((Figuren) zu den Anfangsgründen meines Denkens) という副題をもった『寓話集』にむしろ移されるものだし (11. 358 (Nr. 238), 133 (Nr. 62), 154 (Nr. 98))，いわば伝統的な手法でもあった。しかし，他方で，収奪者が人間的権利に反して「究めつくしえざる（たくらみの）織物を織り」(184. 12 f.)，その黙示録的様相のもとで，民衆が「機械 (Machinen) として使われ」(184. 35)，「靴下製造機の針にしかすぎぬ」(184. 40 f.)，と記されるとき，ペスタロッチは，自身のノイホーフ体験のみならず時代の経済における重農主義の衰亡と手工業の勃興を念頭においている。また，「マクベスの釜」，「魔女の釜料理」をして「盲目的暴力」(234. 2) を換称させ，人間の「不具化」を描く (233. 13〜234. 5)。さらに，ノアの洪水の前の動物的状態の完成像を「キュクロープス達」(Cüclopen) とし (237. 39, 238. 25)，社会的状態での所有への誘惑を「わが動物心のセイレーンの歌 (Sirenengesang)」(228. 45) とするとき，ペスタロッチ自身はオデュッセウスに他ならぬが，かかる神話的表象を用いる言述は，「人類の発展における自然の進行」のもつ共時性を示唆するものである[40]。総じていえば，かかる非概念的比喩的表現方法は，体験世界の自己理解と社会制度一般への理論的接近との不統一ないし把握の困難さを示す反面で，統一的把握はかかる次元でしか達成されえぬという，思想の内実とその表現方式との相関を示している。

IV. 思想の分析主題と社会批判

さて，草稿の分析主題では，成稿の場合にシュプランガーがおこなった，社会的行為およびその範疇にあるものの利己的と好意的の二系列化や，利己系列のフランス革命を境界とする「知識」か

ら「王権」と「自由」から「国法」の二分化のごとき整合的類型化は容易でない。むしろ，身分観念の廃棄と人間像理想との間の亀裂や断絶，フランス革命と啓蒙主義に対応する民主主義と貴族主義のイデオロギーの受容と拒否，『リーンハルト』の改筆と E. フェルレンベルク批判，「義務のイデアリスムス」と「私の道徳感情」との異和感，体制化した宗教と信仰化された心情倫理の対立(225. 11 ff., 224. 21 ff.,)，これらが渦まいていたというのが，『探究』の表面にときにみえ隠れする当時のペスタロッチの深層的真実である。そこでは自然，社会，個人の「状態」におけるそれぞれの「作品」の展開がその世界像の造型と複合し，動物性から人間性の幅での人間学的層構造をなし，家族から国家にわたる領域の社会学的場面が枠構造をなしている。したがって，それらを自己理解の課題とするところに，彼の危機観にはいわば社会科学的と前学問的な層が重なり，それが彼を客観的歴史と主体的生起との境位にひき入れる複合構造がある。個人と社会，規範と現実の組み合わせ，個人の道徳的義務と権力的現実，社会の「自然法的」規範と「大衆化」の現実などの対立のなかでは，一方の肥大は他方の収縮を招き，対立と葛藤としての危機意識を一層激化させずにはおかない。それゆえ，かかる近代市民社会の典型的状況にいるペスタロッチの「私とは何か」という自己理解の課題と「真理と権利」という実践目標とは，下図のごとき問題圏にあったといえよう。

「自然的連関」の構造



すなわち，「自然的連関」(natürlicher Zusamenhang) は，人間と事物との「物理的 (phüsisch) 連関に基盤をもち」(206.29) ながら，社会的行為一般を「人為的 (künstlich) 連関」と「倫理的 (sittlich) 連関」との両局面でもって構造化する (206. 35 f., 207. 19 f.)。「人為的連関」では，典型的には，「協定と契約 (Abreden u. Vortrege) をとおして社会的 (geselschaftlich) となる」(208. 11 f.) が，その制度化における合理的操作性が，自然を歪曲し隠蔽する人為性の限界をはらみ，そのことが主体の「経験によってもち込まれる倫理的連関」のなかで「自由意志」ないし「一般意志」と結合した「権利感情」をめざめさせる (206. 27〜208. 19)。これが「情調 (ゲミュートスティムング)」ないし「力 (クラフト)」によってめざまされる「<真理と権利への内的尊厳>」である。「私を人間にする」(mich zum Menschen machen) のは，自己自身をとおしたそれに向けての「意志 (ヴィレ)」であり，決して「人為的連関」によるのではない (204. 40〜44, 205. 20〜09)。むしろ，「人為的」社会連関は，自己理解としての「私を人間にする」ための条件ないし否定的媒介である。それゆえ，人類の発展史と個人の

発達史との構造的親和性に立つ「自然的連関」の自覚過程の『探究』としては，道徳的状態の前段としての社会的状態と，成人期の成熟に対する青少年期の未熟の様態とがもつ問題性とその媒介機能との把握が重要な課題となる。草稿段階では，封建体制論や革命論の余勢を残こし，成稿のごとき三「状態」と三「作品」の体系的叙述には十分に至りえなかったが，上図のごとき，自然，人為，倫理の全体的構図を提出しながら，専ら社会的状態の問題性と道徳的状態への移行契機の発掘に意を注ごうとする。ここにも社会批判と葛藤とが，双方の分離も一方の捨象もできず，相即相互的であり，自己理解の契機となる理由がある。

上の構造図の理解のためのみでなく，草稿の須要としても特記さるべきは，ペスタロッチが「状態」と「作品」の基底的構造を次のようにおさえていることである。すなわち，「活動空間」(Spillraum) を「自己関心」(Selbstsorge) と係わらせて全体の基礎場面にすえ，そこへ，動物，市民，人間およびそれぞれの三様の自由を組み込みながら，全体的基礎場面が「奪取」(Beraubung) されていく過程をからませていることである。草稿の作成過程では，1頁にみたぬ第8節に「収奪」(Usurpation) と標記しながら，「自由という名づけがたき活動空間」(namenloser Spillraum von Fryheit, 182. 7 f., 13) とする程度で，余白を残こしたものを，4頁近い29節に至って，「私の自己関心の方法である物理的活動空間」(*phüsischer* Spillraum *der Mitteln meiner* Selbstsorge, 215. 6 f.) を現存在の基底に設定した。これには「自己関心」を利己と好意の基底にすえるとともに，それと「自由」とを結合して「自由の活動空間」とするところに，自然概念の二元化がぶつかる限界をこえんとする方向がうかがわれる。その点では，従来，一部の先行研究がペスタロッチの自然概念を二元的に把握したために，思想の生産性に関して若干の閉塞性や通俗化へ流れるきらい必ずしもなしとしなかった。この「活動空間」は，社会的正不正や道徳的善悪の価値基準に関係していないし，また，認識論的，社会学的な平面に固定されるものでもない。むしろ，自己関心は自然的，社会的，道徳的に展開する機能的基底を担い，しかもそれぞれに自律性をもち「自己力」によって展開する「自由の活動空間」である。この場合の自由は，政治社会領域での支配からの自由でなく，自己支配への自由として，いわば存在論的場面の開顕の契機である。この「活動空間」と「自己力」との展開は，「状態」や「作品」の個別性にたたず，「全体のなかの個別的な力の統一」(215. 4)をもった自由な人間の自己活動である。

それゆえ，自由の否定は「動物的，社会的，道徳的存在としての手段の活動空間の物理的奪取」(215.14〜19)につながる。かかる「隷属」(Schlavry) は，「活動空間」と「自己力」を縮少減退せしめずにおかない(217. 32 ff.)。そして，この自己活動空間における自由の阻害作用は，究極的には，「脱人間化をし」(entmenschlichen)，非人間的「去勢」(Entmannung) に及ぶだろう(226. 43)。ここに市民社会における自己理解の危機と葛藤は，単に体制的外在的なものとされて，そのレベルでは解決のはかれない，より根源的な次元の問題となるのである。

草稿を成稿のもとで概観すれば，前者は後者に比して，社会的状態の個別的主題およびその配列

や系列化が未確立であるだけでなく，その状態を「暴力状態（Gewaltszustand）」と「合法的状態（rechtlicher Zustand）」とに二分しようとした形跡もある（237. 26 ff.）。主題項目の軽重についても，成稿での18項目のうち，認識，知識，取得，所有，王権，国法（Kenntnisse, Wissen, Erwerb, Eigenthum, Staatsrecht）等の論述は草稿では少ない。これには，『自然と社会の状態 断片』や『人倫概念の成立』などの先行諸考察や，『読書ノート』末期での「啓蒙主義」，「哲学」，「専政」，「貴族」，「支配」，「服従」等々の主題の考察メモ（10. 234〜237 u. a.）の影響もあろうが，逆に，草稿執筆段階での中心的問題意識は，体制の新旧を問わぬ，社会的状態の人間の権力病理ないし心理的構造の抽出にあったからである。また，成稿，草稿とも「硬化」（Verhertung）や「自己関心」のごとき概念が提出されるが，草稿ではその基底構造ともいうべき，「活動空間」，「奪取」，「矛盾」（Wiederspruch），「自己の隠蔽ないし自己欺瞞」（sich vor sich selber zu verbergen, Selbstbetrug, 235, 24 f.）など，自己理解をめぐる社会的人間の葛藤として主題化しうるものが提示されている。

ペスタロッチには，人為的なものの原初形態は，「もつ」と「知る」の行為である。これらは関心の「不充足」や「困窮」によって発生する（206. 36〜42）。したがって，知は，社会関係にあっては支配知であり，事物関係においては技術知であって，いずれも操作性をその特徴とする。極論すれば，知は利害関心に導かれた操作的認識の営為であり，そのようないわば社会の認識論としての思想は「欲望の体系化」とならざるをえない。そこでは，所有は自己保存の配慮に起因し，その権利が「利益と進歩」の総体として合理的に基礎づけられる（228. 37 ff.）。社会関係においては，一方で，それから分離された個人の幸福追求は私権（Privatrecht）として承認されるが（187. 14 ff.），他方で，現実の「取得」と「財産」には個別的排他性と配分の不平等がある。そこで，類的場面での個別性の衝突と闘争の過程は，自然の人為化ないし合理化という操作技術過程で制度的に緩和がはかられることになる（241.8〜14）。なお，所有と労働については，労働が「労苦，職業，自己克服の緊張」の上でなされ，その限りで「応用」された動物力と「有用化」された倫理と正義として位置づけられ（206. 1 ff.），社会的状態から道徳的状態への移行に備える契機となるのに対し，所有は「感覚性と動物的欲望」との充足にすぎない。それゆえ，労働をとおした所有は，特権と無権利，専有と収奪，利と害のごとき社会場面での不均衡や対立，有機体としての人類とその諸制度との間の亀裂，これらの顕在化に対する制御機能をもつ。社会生活は，利己的欲求を「独占的自立性」（monopolitische Selbständigkeiten, 214. 14）として表出する「万人間の闘争」（Krieg aller gegen alle, 214. 39）であって，かかる「独占的自立性」の追求はその動機と結果において排他性を帯びている。欲求充足の社会場面では，「与えたがらぬが入手したい」という目的が，「与えずして入手しえず」という方法と対立する形で現象し（214. 8 ff.），そこにあらゆる実定的法体系が，身分や階級の特殊限定的権力を支配と利害との対立関係の，いわば無限の暫定措置となり，法と無法の闘争や循環の過程として継続される原因がある（213. 48〜214. 2）。したがって，「社会的自立性」の要求場面では，欲求と享受の「不均衡」（Unverheltnismäßigkeit）およびこれらの「不充足」と「困窮」から結果する「無力感」（Unhelflichkeit）が生じ，「利欲と不具化」（Selbstsucht u. Ver-

stumlung) を生み (213.10〜16), 個別要求と無法とは共存遍在する(213.30 f.)。市民生活には,「法のみが市民に自立性を保障する」(213.22) 面がありながら, しばしばそこでの自立性要求が「市民権の衣を着た無法 (Gesezlosigkeit) への単なる自然的要求になる」(213. 17 f)。かかる社会的人間が求めるのは「社会的自立性ではなく, 非社会的無法である」(214.17)。彼は,「権利のためでなく奉仕のために人間を不具化する暴力秩序を追求し」(233. 48 f.),「社会的に従属する人間を自立的とみなし」(234. 15 f.),「大所有を社会的統一に合致せしめる組織を社会的に合法的 (rechtmeßig) とみなすのである」(234. 58 ff.)。かくて,「無法は一般的であ」(214. 22) り,「<無法は私の自然である>」(214. 19) とともに「自然に権利を導入せねばならぬ」(214. 34) という両面, つまり, 法 (Gesez) と権利 (Recht) が対比され, その現実性と規範性とのなかで破綻を内包した社会的自然ないし非本来的自然としての「人為的連関」が柔構造をもつ全体的自然のなかで統一されねばならない。ここにペスタロッチが権利観念の発生基盤やその概念を論じる理由がある。

彼にとっての権利は, 法が利害と支配の現実状態を固定し合理化して有利かつ優勢に展開せんとする権力性ないし操作性を帯びるのに対し, その問題性を解決せんとする規範的方法的概念であり, 主体的真理との親和関係に立ちながら, 社会的目的的概念としての包括性をもつ。それは, ソスラテスとの問答部分が示すごとく, 究極的には道徳的宗教的内包をもち,「理性と聖性」を兼備した「人間的幸福」の保障条件である (197 f.)。したがって, この「人間的幸福」のための権利は,「権利意識」というより, 暴力ないし本能と知恵ないし意志との対立を媒介する人間学的機能としての「権利感情」に担われ,「人為的連関」と「倫理的連関」との間での「対抗的な権利」として実践的に措定される(207. 30〜208. 5)。そこにこの草稿で社会的状態を「暴力状態」と「合法的状態」とに二分して構想する理由の一端があり(237. 27 f.), また,「民衆にあっての権利の概念は, 不正を蒙ることによってのみ生きたものとなる」(S. 239. 18) ゆえんがある。このため,「人為的連関」としては,「協定と契約によって社会的になる」としても, その「協定と契約および人間の使命との一致をとおしてのみ権利的となるのである」(208. 11〜15)。

そこから自然権と社会的立法ないし契約へのペスタロッチの評価の差が生じる。自己保存の根底にあるのは, 危険とその予知にともなう社会的不安であって, その緩和と解消の方法として, 人は社会的諸制度に自己を関与拘束せしめる。たとえていえば, 殺害される者の前で自分も殺害されるのではと懸念し, 自分がそれをせねば, 相手もせぬだろうと思料して, 自分に「殺すな」といって聞かせる (208. 36〜209. 16, cf. 209. 49〜210. 6)。つまり, 自己被害感が先行し, 加害せずば被害なし, という消極的対応行為が禁令的規範を設定せしめ, その相互承認をはかる。ここには正義と公平の確立は問題でなく, 被害と不正の回避という消極的目的行動が優先し, しかもその回避には他者のためでなく自己のためという動機が潜在する(209. 26〜32)。法はかくのごとき限界をはらむが, いわゆる自然権も「利己と好意の感情の統一」(216. 23 f.) の欠如, 悟性と心情を結合しえぬ人間学的不均衡, さらにはその「媒介」(B. 719) の看過, 総じてこれらの「経験的事実」のゆえに限界をもつ (209. 19 f., 33 ff., 49, 216. 23〜35)。

かかる「人間自然の媒介力」に即さぬところでの権利の感覚は，「利己的，不信的，暴力的になり」(225. 38 ff.)，「国家」は「民衆と国土」に対立してその「社会的統一」を遂行しようとする(220. 45 ff., 226. 1 ff.)。すなわち，その国家は「公共的必要という仮象のもとで」(unter dem Schein des offentlichen Bedürfnisses, 217. 8 f.) 人間学的均衡の喪失を隠蔽し，かつ，市民の「非人間化」に法的強制力を発揮しながら (226. 11 ff.)，身分的階層的諸特権 (Privilegien)を強化する。この特権は，旧体制の王権に代表されるだけでなく，現時体制下の政治経済的領域での私権 (Privatrecht, 187. 20) や独占 (Monopole, 218. 36) でも例外でない。国家における自由は，かかる特権の集積以外のものではないのである(219.17)。このため，特権は，その領域に関しては，社会的な場面での非社会的な要求をし，その機能に関しては，その所有者の動機における非社会性を社会的に合理化し意味づける問題状況を生み出す。つまり，不平等の固定化として発生した国家は，権利の平等原則に対立し(238. 30 ff.)，権利の不均等を招き，王政でもサンキュロットのアナルキーにあっても，恣意と権利喪失 (Willkür, Rechtlosigkeit) をもたらす (220. 1 ff.)。

社会的類的な作品としては，「私は服従 (Unterwerfung) の権利と圧政 (Unterdrukkung) の無権利の両方の強力な証人である」(231. 42 f.)。かかる自己拘束をとおして，人はその社会関係での「依存関係」を合法化し，あわせて自己確認もする(232.1 ff.)。したがって，社会的自由は，「依存関係」からの自由ではなく，むしろそれへの自己拘束として支配服従関係に組みこまれた自他の交錯構造のなかにあり，「政治術」(Staatskunst) や「社会的器用さ」による実践関係のなかで発揮される(226.34, 228.14)。それは，個人の内部意識の抽象次元ではなく，あたかも主人が奴隷の意識内部で無視されても微動だにせず，奴隷は主人への隷属によって「自立性」を確保し，彼の「自由」を救済するのと同様の展開をする。それゆえ，社会的自由は，自己目的としては「生活の享受」を追求し，他者に対してはその「生命の奪取」ないし「非人間化」に係わるところまで突き進む (229. 30 ff., 226. 42)。権力は，他者に向かって，「汝はわが楯 <王> であれ，王であれ」というところに発生し，こう告げられた者は自分を「神的な人類」と呼ぶだろう (183. 43 f.)。金貨を手にする者は，そこに刻まれた像をつねに意識せねばならぬし(232. 4 f.)，常時「支配という犬」のもとにある(184. 27)。このように，権力は弱者の不安の代弁と要請であり，強者にとっては不遜と自己顕示である。服従する側は「悲惨の印象」をもち，支配する側は「策にのせる術 (Kunst der Überlistung) と暴力的奴隷の恐怖 (Schreckken der Gewaltsknecht) との結合をはかる」(210. 11～20)。しかも，かかる権力への野望も期待も「めまいの精神」(Schwindelgeist, 192. 13) からおこる。そこでは，現実的自我の突破を求めながらその境界をくずし，対他的構造関係から逸脱して，権力の欺瞞と虚妄は正体をみせぬままに展開し，めまいのなかへ頽落している。ここには，生きのびんとして求める破壊への傾斜という，いわば実存の崩壊感覚が人間の深層から摘出されている。

ただ，支配と権力は，弱者への強者の威嚇として現象し，それのみが権力病理であるのではない。一方では弱者の側に，次のごときいわば倒錯的権力があらわれるからである。すなわち，「社会的と

呼ぶその瞬間から…本質的に異なる二重の仕方」(211. 5)，ひとつは動物的無力（*Unbehelflichkeit*）のゆえに，社会的状態に入れられるか，もうひとつは反抗的暴力的に支配への不遜さ（*Anmaßungen zum Herrschen*）をもって進むかの場合の，後者がそれである(211. 9〜16)。換言すれば，社会関係における屈服と無権利の前での「荒廃」(Verwilderung) こそ倒錯的権力であり (231. 31 ff.)，弱者が強者の側からの支配操作のなかで「社会的統一に不可欠の手段としての合法的服従の善さを承認され」(232. 17 ff.) ながら，閉塞的ルサンチマンを増幅させる場合である。そこで強者へ依存する「動物的自立性」を保障された弱者は，ペニヒ金貨に刻まれた肖像に強者の威力を認めても，不正義をかぎとってはならない。一切の容認はその保障のために甘受すべき「代償」(Ersaz) だからである(232. 43〜47)。これはいわばその快楽原則を現実原則のもとで相対的に持続するための，権威を意識下に沈澱させたひとつの無意識的対応様式であろう。権力が「めまい」であるのに比し，それに対応する服従は，まさに自我の立ち竦みないし経験の進行停滞であり，めざめへの活力を備蓄せぬその「眠り」(Erschlapp(ff)ung, 234. 12) に他ならぬ。このように，主人と奴隷の代喩で把えられるところの「世界の紐帯」の頽落は，「破壊された大地にふさがる死の天使」(202. 32, 192. 28 f., 197. 24) という極相を呈するだろう。そして，こうなっていくのは，国家ではなくて国土とその民衆である。

「生起するすべてのことを語らんとする人」，実は，これはペスタロッチ自身なのだが，その彼が手稿のメモ (Bd. 12, S. 555) からして草稿の包括的言述とみなしうる次のごとき黙示録的発言をしている。「最後には自己保存の強力な感情が人類の打破された権利に対し粗暴となる。おそるべき時が到来し，国土に権利なく，人々は享楽のみを求めて，こぶしをあげ格闘する。極限にきた権力の堕落も民衆の大いなる悲惨の前で消えうせ，大地は血をあたかも水のように飲みこむ。権力機構は貧者の権利を巻きあげ機械のごとく収奪していく。人類の呪いは，すべて聖化されていたものの上になりひびき，王は民衆たちの，民衆たちは王の，その大いなる悲惨に歓声をあげる」(186. 27〜35)。この「幻想の未来」の想像図は旧体制を打倒して，「国家の崩壊が接近しつつある」(184. 17 f.) ところでの歓声ではない。「最後には…それ(国家の支柱) と権利喪失の不幸で償いえざる悲惨へとおとし入れられた民衆は，墓穴のなかの屍のごとく消えうせる」(186. 40 ff.)。

当時のペスタロッチは，フランス革命論の脱稿後と数年先の教育実践との間にあったが，草稿第1節の著述論の後半が示すごとく，支配体制と革命精神とへの論難をめぐって，その力点のおき方は必ずしも確定せぬところにいた(172. 44 ff.)。権利観念が生気をもつのは，不当さに苦しむ場合であり，それが革命を誘発し，権利意識の高揚をはかるとすれば，革命行動の悪は不可避の必要悪である(239. 18 f., 219. 20〜32)。しかし，支配と服従は，その一方を欠如して成立せぬが，支配の「欺瞞の弱さと不遜の硬さ」(172. 28 f.) が，服従者を「盲目的暴力」(234. 2) へ方向づけ，そこで「大衆的に(en massa)行動し」(222. 6) て，その欲望を肥大させ，彼らに「荒廃」を誘発惹起する。「現代の革命精神は，ほぼ一般的には，人を動物的幸福と社会的権利喪失との忌むべき混同によって沈淪させる荒廃の結果である」(172. 35 ff.)。すなわち，暴政(ティラニー)とアナルキーが同居し，「革

命精神」が「めまいの精神」のなかで権力的となる(192.12)。たしかに，ペスタロッチは暴政のもとで無権利の「<時代の情熱>」と「<私の情熱>」とを同等視するが，「時代の真理」と「私の真理」とは同じでない(170. 16 ff.)。つまり，政治的参加ないしイデオロギー的哲学的思弁と自己理解への志向とは，彼の目には，彼我それなりのパトスなのだが，その実践の方向と次元のみならず方法も相違背反して進行し展開する。それゆえ，「かかる対象(権利と革命の問題)にことばをさしはさみ，党派的人間の情熱に誤解されずにすむことは不可能である」(240. 1 ff.)，とまで告白し告知する。

自己理解にとっては，以上のごとき社会的状態での，知識から支配や暴動にわたる諸現象は隘路となり，先述の「自然的連関」と「自由の活動空間」を阻害する次のごとき共通の様態を生み出す。ひとつは，マキャベリズムと暴動に典型的な権力的行動における「<堕落のなかでの様式設定(Stillstelung)>」(227. 9 ff.)である。この積極的攻撃的様式に対し，もうひとつは，支配や陋習のもとでの抑圧や禁制の結果，「夢へのまどろみながらの沈潜を好み」(211.24)，単なる幻想的「感受性と自己欺瞞の海を日々泳ぎ進む」(235.30)場合である。「そこでは，人類は眠りこみ，その動物的自然の全力をもってそれからめざめることのないように努める」(230. 30, 36 f.)し，「…自分に自分を最も強く隠蔽する人類の弱点がいつまでも続く」(235. 20 ff.)。これは，社会的人間の無意識的自己隠蔽というべきであり，彼は「暴力的かつ人為的欺瞞」のなかで「硬化」や「不具化」へ導かれる(235. 38 ff., 213. 16)。なお，また，かかる術策と自己隠蔽およびその欺瞞は，主体にとっては社会的現実原則の前での自然的要求の屈服とその補償の過程であって，外に向けては「代償」を要求し，内にあっては「その社会的状態が負い目(schuldig)となる」(232. 43 f., 234. 40 f.)。この点では，制度的成立宗教の信仰者は，一方で「<利己の活動空間を本質に前提した人倫性>」(223. 47 f.)にたつ「感覚的操作」(sinnliche Einlenkung, 223. 7)を社会的に表現し，他方で彼自身の「<様式設定>」や内面化としても，法規範と体制の正統性承認へ素朴に方向づけられる。これが，「国家のことがらとして宗教の必要性」(224. 29 f.)が生じ，宗教が「操作という独自な心理学」であり，「人類の操作の最高のわざ」となるゆえんである(223. 9, 24 f.)。

かかる問題性は，ひとつに，欺瞞と矛盾のなかでの「自立」の無意識的な追求，ふたつに，人類史と個人の発達過程の構造的親和性にたって両者が示す既往と将来を看過した現在への沈潜という歴史と経験との進行の遅滞，最後に，イデオロギー・レベルでの権利・義務観念の混乱，要するに「陶酔的不遜(Anmaßungen)」の現象となる(235. 45～236. 8)。これらは，ペスタロッチが多用する表現でいえば，人間の「自然のなかにある矛盾(Wiederspruche)」(236. 10, 17 f., 28 f., 176. 39)，「彼の現存在全体の上におおいかぶさっている矛盾」(236.19)であって，動物，人類，個人の作品としての自然人，市民，人間の「三つの差異の本質に内的に織りなされているもの」(235. 26 ff.)である。この点で「全行為はその自然との格闘であるかにみえ」(202. 7 f.)，いわば「自己とその人類に抗する形で自己のなかで呪われている(verdamt)」(236. 34 f.)のに等しい。「矛盾」の底層には

「作品」としての類と個の同時性と対立とがあり(228. 23〜27)，それが喚起する問題性ないし揺さぶりとして危機の様相を呈するのである。しかし，これは社会体制的に救済しうるものとして，支配のための抑圧と「参加」のための戦略的動機づけの機能に障害をおこしているという意味での危機ではない。類と個の場面での利己と好意の間の人間学的均衡の過剰緊張や破綻可能性を内在化しており，体制への同調の可否とは別次元の，いわば自己同一性(アイデンティティ)の危機である。

しかし，それは「悲惨(エーレント)」だが，同時に転換への否定的媒介であり，その危機脱出を求める形成の弁証法が展開される。ペスタロッチの著述目的もかかる矛盾とその危機の本質究明にあった(176. 45 f., 236. 16)。彼における類と個の対立は，社会学的レベルでのその発生と機能の対立ではない。むしろ,「活動空間」に根拠づけられた場面での「矛盾」として，個は類に対し否定と保存の両契機をもちながら,「類の作品としての社会的形成」が「個の作品としての内的純化に本質的に障害となるものと認める」(236. 321 f.) ことで,「類の作品をおおう悲惨の止揚」がめざされる。その点でこれを担う個人 (Individualitet(ママ))は，いわば役割的人格としての社会学的人格(Persohnlichkeit(ママ)) と異なるし(210. 43, 35)，社会的状態の典型である法や権利における支配合理性や規範的構造にその利害主導的認識やその技術的人為性を看破し，自然的連関の否定としてのその人為的連関が，人間学的均衡への操作性のゆえに，逆に自然的連関の側から否定され，新しい「権利感情」を生み出す。感覚と理性は,「倫理感覚」と「権利感情」に高められ(208.1〜5)，人は,「真理と権利」への視界に立つ。それは,「気分の最内奥へ接近して」(230. 15 f.)，個人と社会との間の「架橋」行為であるとともに，個に内在する自然の存在論的「気分の最内奥へ」向けての，いわば果樹の成長とその「結実」の営みに類したものである(230.23,26〜34, 208.7.)。これによって「私自身の作品として自分の依存的諸関係，その権利と無権利の強大な証人を超え出る」(231. 4 f.) とともに，自由を入手する。この自由は社会的自己の否定をとおした「私自身への主人」(Herr über mich selbst) たることの自由概念，いわば自己支配への自由ないし道徳的自由概念であって，他者の支配からの解放としての政治的市民的な，もうひとつの自由概念と対立し，その否定的媒介をとおして入手されるものである。これは，市民的自由が，一方で，専政からの自由だが，いわば「私」の領域への収束からまぬがれえず，それ自体として「個」の領域を確保しえないし，他方で，社会的統一のための法的強制力として機能するのとは異なる(216.45〜217.5)。その限りで「社会的向上(Veredlung)」は利己と好意の現実的な妥協,「わざ(クンスト)の心理学」(225.4)だが,「内的純化」はそれらを否定的に媒介する「内的向上」の道への自由である。そして,「私自身の作品としては，従属の無権利のなかでの自己否定 (Selbstver〔äugn〕ung) によって自分の偉大さへと止揚する」(231. 19 f.)。これは，社会関係で自己を抹消しえず，自然権論のごとく法と道徳の融合を認めず，むしろ亀裂をみて，市民社会の原理的危機を自覚化しながらその突破口を探る場合の「自己克服」(Selbstüberwindung, 206. 6 ff.) の道程であり，社会から個人への素朴な移行や転換ではない[41]。「個人的な」社会人と「社会的な」個人，政治と教育，権力と自己形成の逆説的弁証法を貫流させた，あくまで人間にとっての「再生」への試み，内在的超越への志向としての真理への帰趨という意味での自己理解である。

V. まとめ

この小論をすすめるにあたり，筆者の問題関心の底には，ひとつに，主題上の問題として，教育ないし人間形成と政治ないし社会との関連がいかに規定されているか，ふたつに，方法論上の問題として，人間学的内在的理解ないし精神史的研究とイデオロギー的，社会史的接近がいかにペスタロッチの全体像に迫りうるか，ということがあった。このこと自体，むしろ，幾多の先行諸研究での問題関心でもあり，多様な方法と対立的な帰結をみせてきたことでもある。ただ，既に，筆者が『夕暮』,『リーンハルト』,『読書ノート』につき，とくにその執筆動機と改筆，草稿と成稿の差，思想表現のための概念語とそれに反発する方法との対立，思想の影響関係や実践の展開における顕在化と潜在化との差異を注目してきた経過からしても，また，ペスタロッチ自身の政治状況の渦中と教育実践の前段というこの90年代の位置からしても，彼の生解釈の決算とも目すべき『探究』の草稿は，一資料の域を超える重要な意味をもっていた。すなわち，この草稿には，『夕暮』のごとき改筆を強いる直接個人的な力は介在せず，『リーンハルト』のごとき社会構想を提示する余裕もなかったし，『読書ノート』や書簡に吐露したごとき心情的な急進性からも一歩出ていた。そして，主題上は『ノート』での「人間の究明」(9.347) や「自著 人間論」(9.356) と合致し，方法的立場はそこにみえる人類学的な客観化などは後退して，主体と客観の二重の意味での歴史生起の視座をもっていた。彼の政治的主題は主体の世界理解で濾化された次元にすえられ，その執筆行為が展開された。かかる執筆過程としてのテキストは，世界開示行為，実存の投企と開明との証しに他ならなかった。テキストは，「人生の結果との内的連関」(169. 17 f.) を示し，「時代の真理でなく私の真理」への「帰趨」を課題として背負っていたのである(170.16〜21)。しかも，それを動機づけたのは，自己同一性危機であり，それが自己理解の課題へ導いた。それゆえ，この自己理解の方法ないしその言語は，客観的認識と概念語の方向でなく，むしろ，いわば現象学の視界にも比すべき「生活性をもった一面性」(169.22)に立脚し，それが「世界の対象をみる方法」となっていた (170. 12 ff.)。また，「状態」と「作品」の対立と転換を基礎づけて深化し，かつ「自然」概念の二元化というアポリアへの転落を回避するために，「自由の活動空間」(182. 7 u. 13) ないし「自己関心の手段たる活動空間」(215. 6 f.) を措定しようとした。そのことが，隠喩的表現の多用とも結びついたが，これは主題分析上の発見的虚構であるとともに，実践課題を前にした彼の社会批判への言語戦略でもあった。その社会批判は，政治社会的実践のレベルと領域に限定しうるものではなく，むしろ人間における権力や自己欺瞞の深層レベルへの洞察であったし，それと，政治と教育，社会と個人の対立的問題圏への接近は，強く関連していたのである。

註

1) 以下において使用するペスタロッチのテキストは，Pestalozzi Sämtliche Werke, hrsg. v. A. Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher, 1927 ff., 28 Bde いわゆる批判版であり，その引用参照個所は，本文中に表

示する。この『探究』の草稿（Bd. 12, S. 167～241）と成稿（Bd. 12, S. 1～166）に関しては，巻数は省略し，頁と行を，たとえば，169頁1行目から175頁5行目までなら，（169.1～175.5）のごとくし，それ以外は，巻数と頁を，たとえば，第4巻559頁なら，（4. 559）と表示する（草稿における1頁の行は最大49行である）。書簡集についても，Johann Heinrich Pestalozzi Sämtliche Briefe, hrsg. v. Pestalozzianum u. v. d. Zentral Bibliothek Zürich, 1946～1975, 13 Bde を使用し，本文中に，（B. 書簡番号）で表示する。なお，両者とも，巻数と頁を Bd. と S. で示す場合は，編者や校訂解説者の付した部分の参照をあらわす。さらに，ペスタロッチ自身の追加訂正をあらわす原文イタリックの場合は符点で，抹消部分の校訂者による復活は＜　＞で，校訂者による補充部分は〔　〕で，示す。

2) 拙稿「ペスタロッチ研究の動向と『夕暮』の文献批判上の問題点」，大阪千代田短大紀要，5, 1975, 45～75.

3) Klafki, W. u. a., Erziehungswissenschaft, Bd. 3, 1971, S. 126～153; Ders, Erziehungswissenschaft als kritisch-konstruktive Theorie: Hermeneutik — Empirie — Ideologiekritik, in: Ztschr. f. Päd., 17 Jg., 1971, S. 351～385.

4) 本論の方法論的基底は，拙稿「教育学の解釈学的基盤」(I), (II)，大阪私立短大協会研究報告，11，1975，85～95，大阪千代田短大紀要，4，1974，43～75 でも若干ふれたが，教育の思想を創出する主体とその認識およびイデオロギーとの連関に関する理論的考察は別稿に譲りたい。

5) この日付は息子ヤコープ・ペスタロッチが記入している。cf. B. Bd. 3, S. 395.

6) 拙稿「ペスタロッチ『読書ノート』の構造と思想—その社会批判，人間学構想および教育思想—」，鹿児島大学教育学部研究紀要，人文・社会科学編，30，1978，31～67.

7) cit., Pestalozziblätter, 1886, VII Jg., SS. 14, 16.

8) 彼は，1783年12月30日付 C. v. Zinzendorf 伯宛書簡（B. 588）で『探究』が指唆されるというが，問題である。Israel, A., Pestalozzi-Bibliographie, Bd. 1, 1903, S. 109.

9) 批判版全集のなかで，この第12巻のみが，文献批判や事情説明の担当者の記名を欠き，序文での作業協力者についても，『探究』関連の3篇のみ記名を欠く。この第12巻の1938年の刊行より3年前に，監修者のひとりシュプランガーによる著名な「探究——分析—」があるが，そこで彼は草稿にふれておらず，批判版の解釈には彼の見地が記名入りで大きく導入されているところから彼が校訂者でないことは確実である。しかし，シュプランガーの上記論文他を収録した Pestalozzis Denkformen, 1959²(1947)の序文（S. 8）の記述から，上記3篇の校訂者がベルリンからアメリカに渡った W. Feilchenfeld であったことが判明する。

10) Otto, E., Pestalozzi, Werk und Wollen, 1948, S. 139 f.

11) Toivio, J., Pestalozzis ≫Lebenskrise(ママ)≫ und seine Auffassungen von Menschen, 1955, SS. 78 ff., 234 ff.

12) Rang, A., Der Politische Pestalozzi, 1967, 194 f.

13) Rufer, A., Pestalozzi, die Französische Revolution und die Helvetik, 1928, S. 265; Barth, H., Pestalozzis Philosophie der Politik, 1954; Bachmann, W., Die anthropologischen Grundlagen zu Pestalozzis Sozialleehre, 1947.

14) Rang, A., op. cit., S. 67.

15) Rang, A., op. cit., SS. 171, 159, 101.

16) Froese, L., u. a., Zur Diskussion: Der politische Pestalozzi, 1972, S. 165 (R. Pippert).

17) Froese, L., u. a., op. cit., SS. 199, 23 (D. Kamper, L. Froese).

18) Krause-Vilmar, D., Liberales Plädoyer und radikale Demokratie, H. Pestalozzi und die Stäfner Volksbewegung, 1978, S. 10 f.

19) Krause-Vilmar, D., op. cit., S. 185 f; Ders, Pestalozzis Dienst für den Geheimen Rat zu Bern (1795), in: Päd. Rundschau, 1975, 29 Jg., S. 775～799.

20) Birk, I., Die empirische Basis des pädagogischen Denkens bei Pestalozzi, 1970, Erlangen-Nürnberger Diss. (unveröffentlicht), SS. 29 ff, 13～28.

21) Brühlmeier, A., Wandlungen im Denken Pestalozzis, von der 'Abendstunde' bis zu den 'Nachforschungen', 1976, *Z*ürcher Diss. S. 27.

22) Brühlmeier, A., op. cit., S. 189.

23) Born, M., Die Einheit von Pestalozzis Anthropologie und Pädagogik — Der Freiheitsbegriff der ≫Nachforschungen≪ und der pädagogischen Schriften von 1799 und 1801—, 1977, Essener Diss. (unveröffentlicht), SS. 1 f., 355, 90～180.

24) Born, M., op. cit., S. 213～237.

25) ドイツでの一例を数字であげれば，読書サークルの数は，1760年代5組，70年代50組，80年代170組，90年代200組，定期刊行物は500種に及んだ。cf. Prüsener, M., Lesegesellschaften im achtzehn Jahrhundert, Ein Beitrag zur Lesegeschichte, Sonderausdruck aus dem ≫Archiv für Geschichte des Buchwesens≪, Bd. XIII, 1972, SS. 411, 426, 380, 375. また，著作家の数は，1773年 3300人，1787年 6000人，住民1人あたりの比率では，ゲッチンゲンで1対100，ライプチヒで1対170，ベルリンで1対675という数字がある。cf. Bruford, W. H., Germany in the eighteenth century—the social background of the literary revival—, 1952 (1935), 上西川原訳，278～9頁；Hürlimann, M., Die Aufklärung in *Z*ürich, 1924, Leipziger Diss., S. 225 ff.; Habermas, J., Strukturwandel der Öffentlichkeit, 1979[10] (1962) S. 69.; 拙稿「『リーンハルトとゲルトルート』の初版成立と作品における社会と民衆」，大阪千代田短大紀要，6，1976，1～37.

26) 拙稿 前註 6) 参照。

27) Otto, E., op. cit., S. 139.

28) Silber, K., Zur Pestalozzis Reise nach Deutschland, in: Pestalozzi-Studien, Bd. 2, 1932, S. 123 f.

29) 正式のタイトルは以下のごとくである。Darzwischenkomft des Menschengefuhls im Streit einiger Meinungen uber das thierische, das gesellschaftliche und das sittliche Recht unserer Natur.

30) 37節以下42節までは，校訂者も本稿での該当個所を記さぬが，37節は社会的状態を「暴力状態」と「権利状態」に二分し，38節は市民的幸福と政治制度論に関する問題提記で，成稿の全体構造とその帰結に沿い難く，42節なども部分的には『読書ノート』の「人間論」(10. 349 f) に類似する。なお，39節は当初『スイス書簡メモ』(1795/6) のものが，その草稿に移された，と校訂者はいうが，その指示個所に該当する記述はない。いずれにしても，この37節以下と成稿との関連はむしろ疑わしい。

31) この「計画」が『探究』草稿かどうかは確定が難しい。その確定には成稿の構造や執筆過程とその時期とが関連するが(後註32)参照)，この Escher 宛書簡をめぐる解釈も次のごとく流動している。それをはじめて紹介した Pestalozziblätter の編集委員会は，シュテーファー運動に関連づけたが，草稿とはしていない。イズラエルも収録はするが，コメントを控えている。オットーは，草稿の時期は95年から97年の当初とするが，その後，これを書簡 B. 727 として収録したデュンクとシェーネバウムは，その解釈に成稿と草稿とを区別せず，単に『探究』だと推定している。さらに，クラウゼ＝ヴィルマールも草稿と成稿を一括して把えながら，この時期を批判版の校訂者ファイルヘンフェルトに卽して位置づける。以上の次第で，本論では，時期確定は今後に期すべき，ひとつの重要な問題だと考える。cf. Pestalozziblätter, 1893, XIV Jg., S. 40; Israel, A., op. cit., Bd. 2, S. 41; Otto, E., op. cit., S. 141; B. Bd. 3, S. 408; Froese, L., u. a., op. cit., S. 108.

32) この「<1795>年」という境界につき一言するならば，93年から95年の「信じがたい労苦の3年間で書いた」(13. 185)『探究』は，校訂者のいうところでは，その成稿を二段階で完成しており (Bd. 12, SS. 774, 777 f.)，その境界は95年7月であった。クラウゼ＝ヴィルマールは，正確な時期確立は今後の課題としながらも，成稿に関し，7月以前を S. 1～41, 44～47, 50～57. 4 とし，7月中ないしそれ以後のものを S. 42～43, 49 (?), 57. 5～166 としている。なお，ランクの問題点のひとつもこの点への看過にあるとする。cf. Froese, L., op. cit., S. 108.

33) Dejung, E., Resultate der kritischen Gesammtausgabe von Heinrich Pestalozzis Werken und Briefen,

in : Päd. Rundschau, 1977, 31 Jg., S. 1004; Pestalozzi, Werke und Briefe, in: Informationen zur Erziehungs- und Bildungshistorischen Forschung (IZEBF), 1979, Hft. 11, S. 73～76.

34) 草稿の冒頭部分でのこの言句が，それ以前の紛失している草稿の所在を想定せしめる。

35) 彼はこの「生活性」を「時代の哲学的概念」と対立せしめるのだが，この段落では「さる高潔な女性への全幅の信頼」を念頭においている。この女性は Franziska Romana von Hallwil であり，92年の彼女宛の書簡 (B. 695) や『読書ノート』の85年段階のものにも登場するだけでなく (9. 306 f., 322 ff.)，1808年，「我が母たりし，比類なき人」ではじまる長大な詩を献じた当の相手である (21. 103～203)。この点，『探究』成稿で「貴人」として D. フェルレンベルクが登場するのと異なり興味深い (12. 7 f.)。

36) Fink, E., Erziehungswissenschaft und Lebenslehre, 1970, S. 37.

37) Spranger, E., op. cit., S. 96 u. Tabelle.

38) この問題の書は，本来なら，既刊の第21巻に収録されるはずだが，排除され別巻刊行となる (Bd. 21, Vorwort)。Heinrich Pestalozzi Gesammelte Werke in zehn Bänden, hrsg. v. E. Bosshart u. a., 1946, Bd. 10, S. 91～233.

39) ヴェルナーは，後期ペスタロッチの「象徴世界」の開始の徴しは中期の1793～98年の時機にみえはじめる，という。cf. Werner, G., Die Symbole Pestalozzis, 1954, S. 69.

40) 上記の「機械」や「キュクロープス」の例は成稿 (52. 32, u. 65. 4) に使用されている。

41) これは既に『読書ノート』における85年後半の段階で「道徳秩序」を考察し，「人間の究明」と標記した個所 (9. 347～361)，さらに，92，3年頃，U. v. Knigge が，人類の未開，混迷，開化の，いわば歴史哲学的三段階に，幼児，少年，国民を該当させた啓蒙主義に一般的な通念に抵抗しながらも，自然状態への素朴な復帰を説くのでもなく，むしろ「社会という混乱の道を通過して純粋自然生活の単純な神聖さへ帰される」(9. 236 f.) と『ノート』の一定程度の総括と目しうるメモを記したところとも関連する (10. 235 ff.)。拙稿，上註6) 参照。

RESÜMEE

Toshiaki MIYAZAKI: Zu Schreib- und Denkweisen in J. H. Pestalozzis *Entwürfe zu den „Nachforschungen"* — Selbstverstehen und Gesellschaftskritik —, Staatl. Univ. Kagoshima (Japan)

Am Anfang dieser Betrachtung stehen die folgende Fragen:

1. In welcher Beziehung stehen die Menschenbildung und die Politik in Pestalozzis Denkformen?
2. Wie kann man mit den geisteswissenschaftlichn oder hermeneutischn Forschungsmethoden und den sozialhistorischn oder ideologischen Analysen, die gegeneinander stehen, das ganges Bild Pestalozzis machen oder nicht?

Der vorliegender Beitrag liegt nach den folgenden Vorarbeiten derselber Verfasser: eine textkritische Analyse der „*Abendstunde*" und ihrer Gedankenstruktur (1975), die Entstehungsgeschichte der ersten „*Lienhard und Gertrud*" und ihren Gesellschafts- und Volksbild (1976), und eine Analyse der „*Bemerkungen der gelesenen Büchern*" und ihrer Gesellschaftskritik und anthropologischer Entwurf (1979).

In den fünf Abschnitten der vorliegende Arbeit über die „*Entwürfe*" handelt es sich um folgenden Themen: I. Textproblem und die problematische Trends der bisherigen

Forschungen. II. die Entstehungsprozeß und die Inhaltstabelle. III. Pestalozzis Standpunkt und Weisen in seinen Denkarbeiten. IV. die Gesellschaftskritik und der Weg zum Selbstverstehen. V. Rückblick.

In diesen Beitrag haben die Folgende analysiert, erörtert und geschloßen werden:

1. „*Entwürfe*" werden von Pestalozzi geschrieben, indem er sich als ein geschichtliches Wesen in der subjektiv-existentiellen und objektiv-historischen Sinnen versteht.

2. Daher waren sie Text, in den seine Existenz in die Geschichte entworfen und darin erhellt wird. Der Bogen, mit Pestalozzis Worten, war „das Resultat meines Lebens" und hing damit innig zusammen, und er sollte „die Wahrheit meiner selbst und nicht die Wahrheit meines Zeitalters" sein. Für ihm ereignet dies sich infolge der Identitätskrise, und führt ihn vor der Aufgabe des Selbstverstehen hin.

3. Sein Selbstverstehen war auf den „lebhaffter Einseitigkeiten" in der „Spielraum der Fryheit" begründet werden, weil für Pestalozzi waren „sie zu tief mit der Art, wie ich die Gegenstände dieser Welt ansehet, und der Lebhaftigkeit meiner Individualitet verbunden."(sic!)

4. Seine Schreibweise war nicht begrifflich, sondern metaphorisch. Und seine metaphorische Art war sowohl die heuristische Fiktion für seine Themenanalysen als der Wortsstrategie für seine Gesellschaftskritik. In den Tiefe der gesellschaftlichen Aktion des Menschen entdeckt er negative Machtswille und Selbstbetrug im Gegensatz zu Menschenbildung.

(15. Okt. 1979)